

資料 1

2015 年から
2026 年まで
の特別採捕
個体数、放
流数、放流
時の体長
(mm)、湿重
量(g)、死亡
率を示した。
死亡率は各
水槽に投入
した個体の
総数から算
出した。

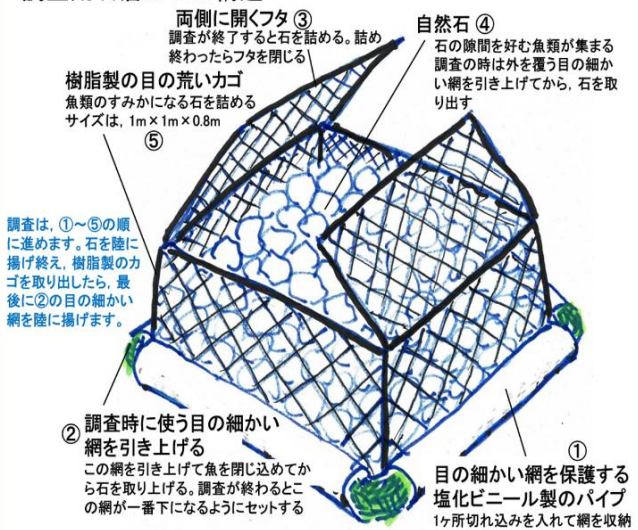
放流年	放流個体数計	特別採捕個体数	死亡率 (%) *1	平均体長 (mm) *2	平均湿重量 (g) *2	備 考
2015 年	52	62	16.13	92.8	0.81	2015 年 4 月 1 日より許可
2016 年	590	669	11.81	91.1	0.68	
2017 年	956	1614	40.46	92.0	0.69	放流数は 2016 年継続飼育 5 個体を含む
2018 年	667	898	23.26	87.9	0.65	放流数は 2017 年継続飼育 26 個体を含む
2019 年	868	859	0.50	88.7	0.64	放流数は 2018 年継続飼育 72 個体を含む
2020 年	4303	4613	6.83	80.0	0.49	放流数は 2019 年継続飼育 62 個体を含む
2021 年	1340	1444	6.77	79.4	0.47	放流数は 2020 年継続飼育 64 個体を含む
2022 年	1486	1639	9.33	77.0	0.42	放流数は 2021 年継続飼育 10 個体を含む
2023 年	284	367	7.36	80.2	0.45	放流数は 2022 年継続飼育 17 個体を含む
2024 年	1226	1282	5.23	79.9	0.49	放流数は 2023 年継続飼育 56 個体を含む
2025 年	1916	2078	2.89	77.5	0.42	放流数は 2024 年継続飼育 39 個体を含む
2026 年	698	959	11.02 *3	77.6	0.43	放流数は 2025 年継続飼育 112 個体を含む 2026 年 8 月の飼育個体数は 255 個体
合 計	14386	16484	*1: 死亡率は 12 月時点の死亡数から算出 *2: 平均体長と平均湿重量は放流個体の平均 *3: 2026 年の死亡率は 8 月までの死亡個体より算出 (死亡 118 個体)			

資料 2

石倉かご(模式図)
調査用の石倉かご
は 8cm ほどの目
の荒い樹脂製のカ
ゴに石を詰めて、
調査するときにそ
の周りを覆った目
の細かい網を引き
上げて魚類が逃げ
ないようにした後
で、石を取り出し
て定量的な調査が
できるように工夫
した漁具である。
写真は、目の細か
い網を引き上げて
これから石を取り
出そうとしている
様子。石は参加者
全員で協力して
引き上げる。石の
サイズはターゲット
とする魚類の大
きさで変えている
が、私たちは 30cm
ほどのウナギが好
む直径 15cm ほど
の自然石を使っ
ている。



調査用石倉かごの構造

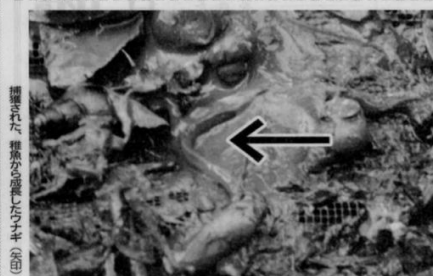


資料 3

有明新報 2016 年 12 月 15 日記事
放流個体の平均は 8cm 程度だが、
13cm まで成長したウナギ稚魚が再捕
獲できた。この頃の生徒は昔はたく
さんウナギがいた柳川掘割にもどそう
という正義感と、ウナギ研究本来の面白
さに夢中になっており、これが私たち
のウナギ研究の原動力となっていた。
下に石倉かご調査の例を示す。

2017 年		10 月		23 日		14:00 ~		時	
石倉かごモニタリング(あめんぼセンター前)上流側(東側)石倉かご		個体数		平均体長(mm)		最大体長(mm)		個体重量平均	
種名		個体数		平均体長(mm)		最大体長(mm)		個体重量平均	
淡水魚類		1		81.0		81		0.5	
ムギク		4		105.3		121		17.2	
ヤリタナゴ		4		102.5		119		17.4	
フナ		8		83.1		101		7.8	
ドンコ		6		48.7		92		2.1	
オヤニサヒ		1		88.0		88		7.0	
エビ類		18				54.1		54.1	
スジエビ		17				38.1		38.1	
貝類		88				2.0		179.1	
タニシ		5				1.8		9	
カワニナ									
0 種名		個体数		平均体長(mm)		最大体長(mm)		個体重量平均	
淡水魚類		1		101.0		101		10.1	
ムギク		4		47.5		55		1.2	
ドンコ		2		89.5		95		0.7	
ヤリタナゴ		2		39.0		40		0.7	
カサガサナゴ		2		98.5		100		11.1	
フナ		2		105.5		115		15.2	
ヤリタナゴ		1		64.0		64		4.4	
オヤニサヒ		18				87.0		87	
エビ類		11				16.0		16	
スジエビ		0							
貝類		28				3.5		98.8	

掘割でウナギ復活



放流稚魚 13 センチに成長

伝習館高 水環境改善の兆し

柳川

柳川市の掘割にウナギを復活させる活動している NPO の法人である A 森福・院を和と伝習館高生協、九代市教育委員会と協力して行っている。今年 7 月 10 日放流したウナギの稚魚が 13 センチに成長した。伝習館高生協の協力で、掘割の土壌を浄化し、ウナギが住める環境を整えている。掘割の土壌を浄化し、ウナギが住める環境を整えている。掘割の土壌を浄化し、ウナギが住める環境を整えている。

モタリナギは 4 月 24 日、掘割の土壌を浄化し、ウナギが住める環境を整えている。掘割の土壌を浄化し、ウナギが住める環境を整えている。掘割の土壌を浄化し、ウナギが住める環境を整えている。

掘割の土壌を浄化し、ウナギが住める環境を整えている。掘割の土壌を浄化し、ウナギが住める環境を整えている。掘割の土壌を浄化し、ウナギが住める環境を整えている。

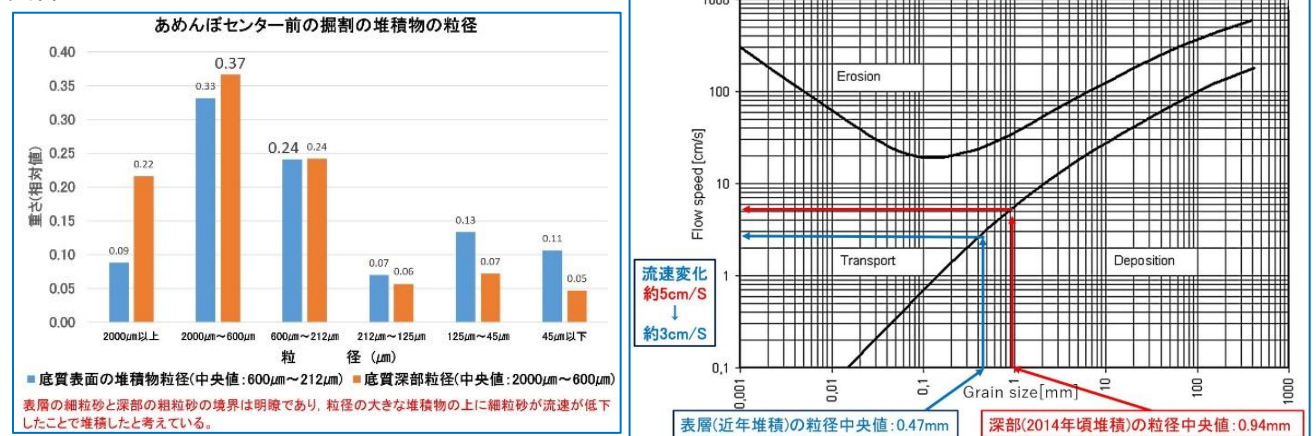
2014 年から 2022 年石倉かごを撤去するまでの魚類、甲殻類、貝類の種数のまとめ

No.	種名	科	14.10.13	14.12.7	15.7.12	15.9.12	15.12.7	16.4.24	16.7.30	16.12.11	17.4.23	17.9.10	17.10.28	17.12.23
1	ニホンウナギ	ウナギ科	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	1 個体	2.6	1 個体	2.8	個体
2	ギンブナ	コイ科	個体	個体	2 個体	38.6	個体	個体	個体	個体	1 個体	14.5	2 個体	36.4
3	ヤリタナゴ	コイ科	11 個体	26.8	8.7 個体	467.7	8 個体	68.7	28 個体	135.3	8 個体	73.3	4 個体	59.4
4	アブラボテ	コイ科	個体	個体	個体	個体	4 個体	3.6	2 個体	4.1	個体	6 個体	8.3	個体
5	カネヒラ	コイ科	個体	5 個体	48.3	個体	4 個体	15.9	2 個体	11.4	1 個体	13.4	個体	5 個体
6	タイノクバラタナゴ	コイ科	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	1 個体	1.3	個体
7	ニホシバラタナゴ	コイ科	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	1 個体	1.3	個体	個体
8	カサトキタナゴ	コイ科	1 個体	0.9	個体	8 個体	9.7	1 個体	0.6	個体	1.6	個体	4 個体	5.3
9	オイカフ	コイ科	6 個体	6.8	個体	個体	個体	個体	個体	2 個体	16.2	個体	2 個体	1.4
10	カラムツ	コイ科	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体
11	モツゴ	コイ科	個体	2 個体	9.4	個体	個体	個体	個体	1 個体	3.2	2 個体	10.7	個体
12	ナツヒガイ	コイ科	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	5 個体
13	ムギツク	コイ科	1 個体	12.5	14 個体	112.7	10 個体	35.4	16 個体	112.4	11 個体	56.8	17 個体	217.9
14	ゼザラ	コイ科	16 個体	21.4	個体	個体	4 個体	7.1	個体	個体	2 個体	4.9	個体	個体
15	ツツフキ	コイ科	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	1 個体
16	イトモロコ	コイ科	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体
17	ナマズ	ナマズ科	1 個体	5.3	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体
18	オヤニミ	ケツギョ科	個体	個体	個体	2 個体	9.2	1 個体	8.8	1 個体	8.9	1 個体	0.8	1 個体
19	ブルギル	サンフィッシュ科	1 個体	7.1	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	2 個体	11.4
20	ドンコ	ドンコ科	3 個体	17.9	7 個体	133.6	34 個体	95.3	28 個体	63.8	13 個体	141.8	13 個体	648.8
21	ヨシノボリ	ハゼ科	1 個体	0.5	個体	個体	2 個体	1.4	1 個体	0.6	個体	個体	個体	19 個体
22	シモフリシマハゼ	ハゼ科	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	10 個体
1	テナガエビ	テナガエビ科	2 個体	10.8	個体	1 個体	6.5	3 個体	8.7	個体	個体	21 個体	79.6	5 個体
2	スジエビ	テナガエビ科	48 個体	40.8	## 個体	190.8	30 個体	41.3	50 個体	59.3	個体	10 個体	2.3	22 個体
3	ヌマエビ	ヌマエビ科	7 個体	1.6	個体	個体	個体	3 個体	0.6	個体	個体	2 個体	7.4	1 個体
4	ミナミヌマエビ	ヌマエビ科	個体	個体	個体	個体	個体	3 個体	0.3	2 個体	0.2	個体	0.1	個体
5	ザリガニ	ザリガニ科	2 個体	42.0	1 個体	14.5	3 個体	80.6	個体	個体	1 個体	1.8	3 個体	27.3
1	シジミ	シジミ科	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	8 個体	4.7	個体
2	イソガイ	イソガイ科	個体	個体	個体	2 個体	4.0	個体	個体	2 個体	21.3	個体	個体	個体
3	ドソガイ	イソガイ科	個体	個体	個体	2 個体	個体	個体	1 個体	2.0	1 個体	15.0	2 個体	41.8
4	カマコナ	カマコナ科	個体	2 個体	6.0	66 個体	254.0	45 個体	144.0	30 個体	39.2	38 個体	108.3	38 個体
5	タニシ	タニシ科	12 個体	38.0	29 個体	96.0	70 個体	306.0	## 個体	469.0	93 個体	194.4	78 個体	230.6
生物量合計(g)			10 種	217.9	13 種	1093.5	10 種	936.1	13 種	1030.7	10 種	530.5	12 種	1293.7
			11 種	592.4	16 種	871.6	14 種	641.4	10 種	487.7	11 種	719.6	12 種	463.2

18.3.11	18.8.18	18.11.17	18.12.23	19.4.20	19.8.25	19.11.3	19.12.21	20.8.13	20.10.24	20.12.5	21.7.24	21.12.18	22.7.31	個体数計	生物量計
2 個体	4.1	個体	1 個体	1.4	13 個体	6.2	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	73 個体	50.1
21 個体	256.6	個体	1 個体	13 個体	6.2	個体	9 個体	75.7	9 個体	75.7	2 個体	22.3	個体	65 個体	887.2
8 個体	104.3	個体	個体	2.0 個体	17.0	個体	個体	個体	6 個体	86.4	個体	個体	個体	193 個体	1390.9
3 個体	16.7	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	15 個体	32.7
個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	21 個体	147.2
1 個体	9.8	個体	個体	1 個体	3.1	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	2 個体	12.9
個体	個体	個体	個体	2 個体	3.3	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	3 個体	4.6
2 個体	2.5	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	19 個体	22.0
個体	個体	個体	4 個体	1.6	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	12 個体	24.6
個体	個体	1 個体	0.4	1 個体	0.4	個体	3 個体	22.4	個体	個体	1 個体	1.5	個体	5 個体	24.3
1 個体	6.5	2 個体	11.5	1 個体	3.0	6 個体	9.4	1 個体	7.8	個体	1 個体	8.2	4 個体	29.0	2 個体
個体	個体	1 個体	9.5	1 個体	8.5	個体	個体	個体	1 個体	18.0	個体	個体	個体	28 個体	124.2
6 個体	44.1	3 個体	20.6	4 個体	38.4	3 個体	24.2	10 個体	86.5	2 個体	7.3	2 個体	7.3	2 個体	120.5
個体	個体	個体	個体	1 個体	0.5	個体	個体	個体	個体	6 個体	56.1	6 個体	67.0	4 個体	3.8
個体	個体	個体	個体	1.0 個体	13.8	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	24 個体	34.8
個体	個体	1 個体	1.5	個体	1 個体	3.0	4 個体	1.3	4 個体	1.3	個体	個体	個体	1 個体	13.8
個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	10 個体	7.1
個体	2 個体	5.4	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	1 個体	5.3
個体	個体	1 個体	0.9	2 個体	9.8	個体	1 個体	23.5	1 個体	23.5	個体	個体	個体	11 個体	54.8
14 個体	53.3	38 個体	71.1	14 個体	19.6	7 個体	49.8	3 個体	92.5	20 個体	97.1	20 個体	97.1	7 個体	47.8
個体	個体	1 個体	1.7	1 個体	2.8	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	2 個体	4.5
4 個体	30.6	個体	19 個体	100.3	2 個体	7.5	11 個体	49.8	11 個体	16.5	11 個体	16.5	140 個体	203.9	5 個体
1 個体	1.5	2 個体	4.9	個体	1 個体	4.9	1 個体	0.4	9 個体	10.4	9 個体	10.4	個体	1 個体	0.9
1 個体	0.4	1 個体	0.1	5 個体	0.7	12 個体	1.5	4 個体	0.7	個体	個体	個体	個体	4 個体	0.3
個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	1 個体	0.1	2 個体	0.3	個体	5.6
個体	1 個体	4.4	個体	個体	1 個体	3.6	1 個体	6.3	1 個体	6.3	個体	5 個体	9.2	個体	9.2
個体	個体	3 個体	4.6	個体	2 個体	2.3	2 個体	2.3	個体	2 個体	1.3	個体	個体	個体	1.3
個体	個体	個体	個体	個体	1 個体	3.1	1 個体	3.1	1 個体	1.6	個体	個体	個体	個体	個体
個体	2 個体	6.3	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体	個体
12 個体	24.1	237 個体	239.5	74 個体	193.6	17 個体	45.2	24 個体	75.5	142 個体	326.6	142 個体	326.6	3 個体	6.3
13 種	554.5	10 種	365.5	12 種	376.3	15 種	187.2	12 種	340.0	11 種	570.1	11 種	570.1	10 種	407.8
			7 種	325.0	10 種	436.5	10 種	866.5	8 種	376.3	2 種	137.0	3 種	13.9	32 種
			14405.0												

2019 年頃から石倉かごに細粒有機物(ヘドロ状)と細粒の碎屑物が堆積するようになり、2021 年 12 月から魚類ではドンコしか捕れなくなった。私たちは、ヘドロが石の間を塞ぎ魚類が石倉を使わなくなったと考えた。

資料 4

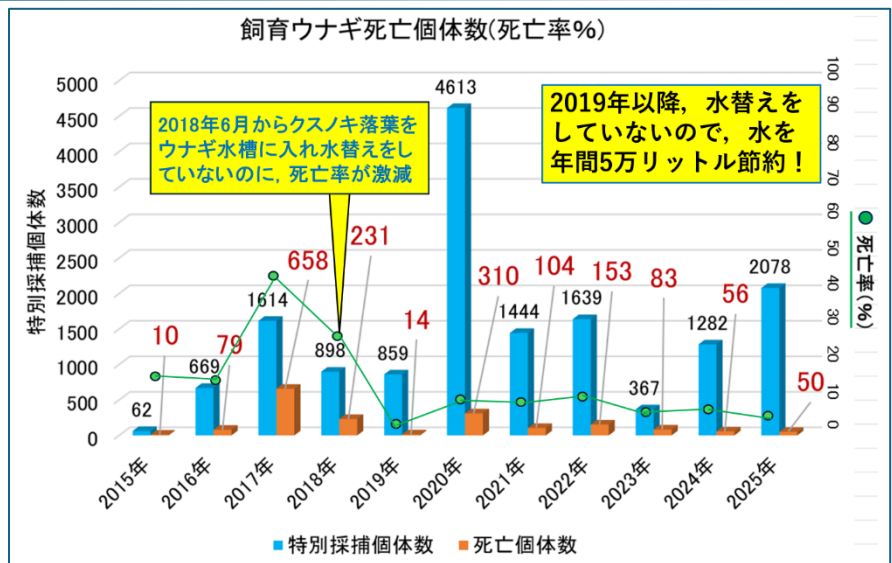


石倉かごを設置した掘割の表面と 25cm ほど深部の碎屑物の粒径をフルイを使って比較した結果から、ユルストロームダイヤグラムで堆積時の流速を推定した。その結果、昔は約 5cm/S(赤)だったが、2022 年では約 3cm/S(青)、流速が遅くなった。柳川掘割の石倉かごで魚類が捕れなくなったのは掘割に流れ込む水の流速が遅くなったことが原因である可能性が大きい。

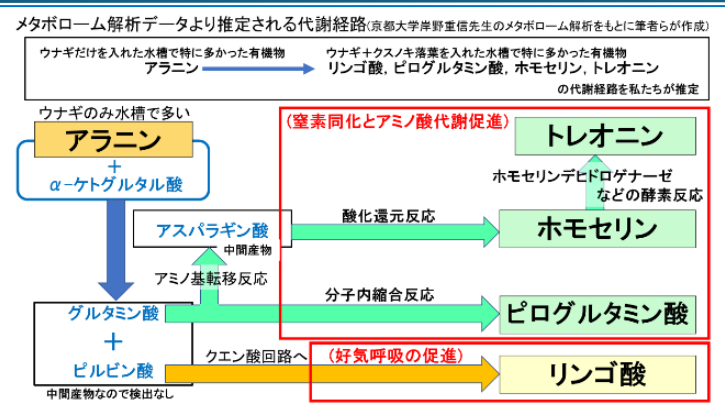
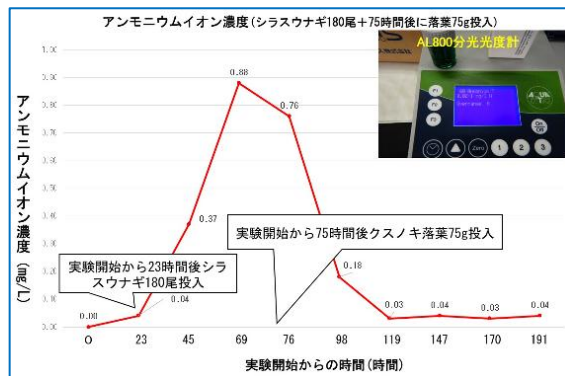
資料 5

飼育ウナギの死亡数の推移

クスノキ落葉を入れた 2018 年 6 月から水替えをしていないのに感染症に罹る個体が無くなり死亡率が激減した。2018 年 6 月までは白点病や水カビ病が見つかった水槽はニューグリーン F で治療していたが、感染症が発生した水槽では多くのウナギを死なせてしまった。クスノキを入れてからは水替えをしていないので、毎日の水替えの労力から解放され、生徒が放課後に研究できるようになり、クスノキ落葉の秘密解明に繋がった。



資料 6



京都大学フィールド科学教育研究センターの先生方の水質分析と細菌叢の解析、北部九州河川利用協会と藤原ナチュラルヒストリー振興財団の助成金を使わせて頂き、生徒はウナギ水槽で起こったアンモニア減少のしくみを考えた。

落葉を入れると直ぐにアンモニア濃度が低下する。落葉に付着していたアンモニアを直接取り込みアミノ酸を合成できる細菌が、ウナギの排出したアンモニアを代謝し、アンモニア濃度を低下させたことがわかった。この最近では、アミノ酸代謝能を持つプロステコバクター属の可能性が高い。

Table 3 Relative abundance of especially major OTUs (%)

OTU	EL1-turbid	EL1-surface	EL1-middle	EL1-bottom	EL2-middle	EL2-bottom	E-surface	E-middle	L-middle	L-bottom
OTU_1	0.00	15.33	16.99	16.32	30.02	16.13	0.01	0.01	0.01	0.00
OTU_2	0.00	0.71	0.99	0.73	0.00	0.00	0.00	0.00	25.91	78.28
OTU_3	0.00	2.69	3.19	3.36	0.09	0.11	30.54	33.05	0.08	0.00
OTU_4	0.00	18.56	20.99	19.71	1.71	1.33	0.00	0.00	0.00	0.00
OTU_5	20.90	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00
OTU_6	17.08	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.01	0.00
Total	37.98	37.28	42.16	40.12	31.83	17.57	30.55	33.06	26.01	78.28

Table 2 List of major OTUs

OTU	domain	phylum	class	order	family	genus
OTU_1	Bacteria	Bacteroidetes	Bacteroidia	Flavobacteriales	Flavobacteriaceae	Flavobacterium
OTU_2	Bacteria	Proteobacteria	Gammaproteobacteria	Betaproteobacteriales	Betaproteobacteriaceae	Polydora
OTU_3	Bacteria	Proteobacteria	Gammaproteobacteria	Alteobacteriales	Alteobacteriaceae	Rhodocycla
OTU_4	Bacteria	Proteobacteria	Gammaproteobacteria	Betaproteobacteriales	Methylobacteriaceae	unclassified
OTU_5	Bacteria	Verrucomicrobia	Verrucomicrobiae	Verrucomicrobiales	Verrucomicrobiaceae	Prosthecothrix
OTU_6	Bacteria	Verrucomicrobia	Verrucomicrobiae	Chthoniobacteriales	Terribacteriaceae	Terribacterium

Prosthecothrix (属)

また、京都大学の吉田天士先生からウナギだけの水槽、ウナギと落葉の水槽、落葉だけの水槽でそれぞれ細菌叢の解析を行いました。細菌のはたきで分かっているものは少ないのですが、ウナギと落葉の水槽で20%を占めるOTU_5に、Prosthecothrix属のバクテリアがいました。この属の最近では窒素代謝能を持つ種が報告(Jangho Lee and others, 2014)されています。

資料 7

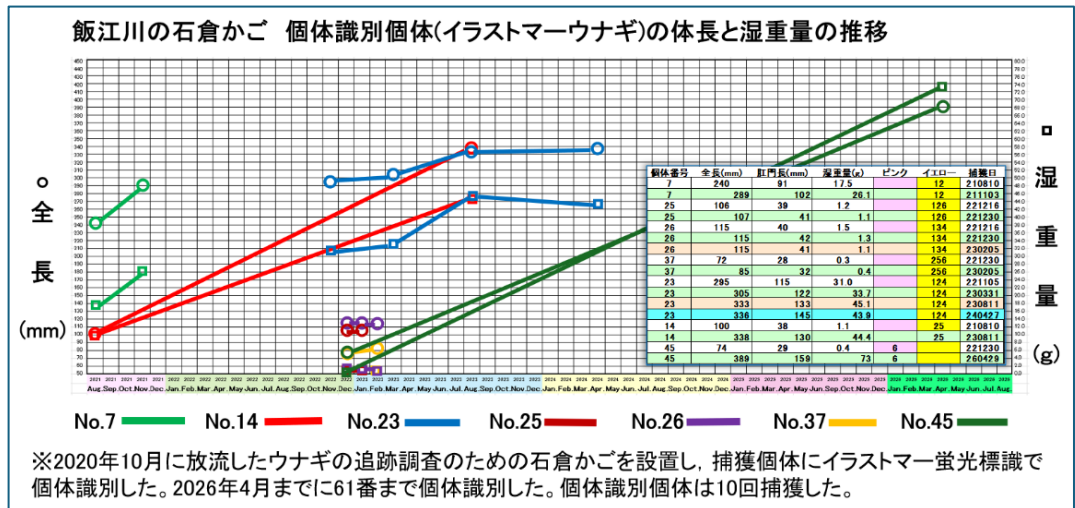
桜舞館小学校の児童と石倉かごを設置し、ウナギ稚魚を放流した。桜舞館小学校との放流と石倉かごの調査は現在も続いている。飯江川放流数は今年で3900 個体になった。

飯江川放流年	放流個体数計	平均体長(mm)	平均渾重量(g)
2020年	611	77.3	0.45
2021年	872	80.4	0.49
2022年	710	77.7	0.44
2023年	146	80.5	0.46
2024年	623	80.4	0.51
2025年	596	79.9	0.49
2026年	342	77.7	0.44
合計(平均)	3900	79.1	0.47



資料 8

右のグラフは飯江川石倉かごで捕獲した個体識別ウナギの体長と湿重量の推移を表している。昔はたくさんのウナギが飯江川にはいたのに、このようにたくさんのウナギが再捕獲できるのは、飯江川にウナギが育つ環境が残されていることと、私たちが放流したウナギが可動堰のせいで移動しにくい環境にあったからだと考えた。



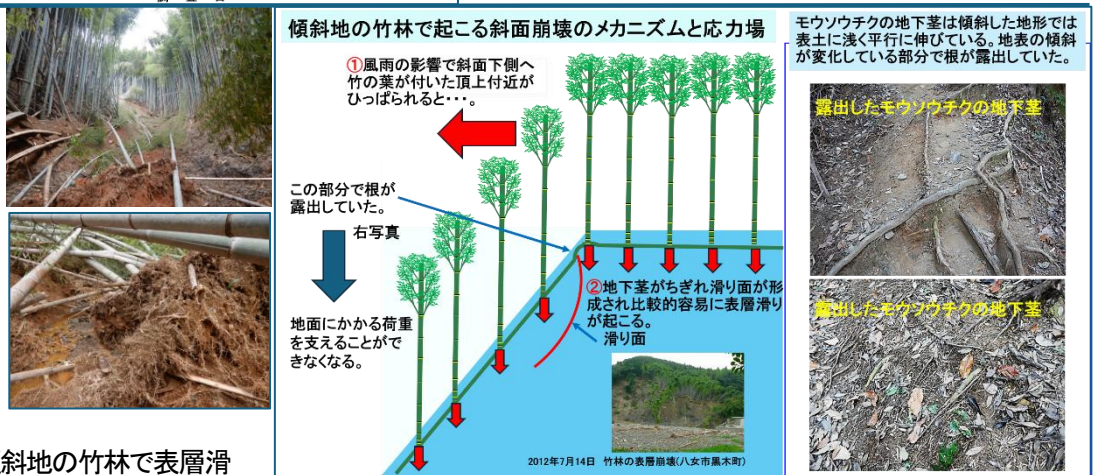
資料 9

飯江川の可動堰と飯江川石倉かごで捕獲された魚類の種数(ウナギを含む)。飯江川は豪雨時に氾濫することが度々あり、可動堰は農業用水を確保し豪雨時には水をサッと流すために設置された。可動堰のおかげで魚類の多様性は乏しいが、人々の命を守る可動堰を撤廃してほしいとは言えない。



資料 10

令和2年7月豪雨で表層滑りを起こした竹林。竹林の地下茎と根は浅く、表面には黒い腐植層は見当たらない。竹林の土壌は赤い粘土で吸水力も小さいことが予想できる。右の図は、傾斜地の竹林で表層滑りが起こりやすいことを表している模式図である。



資料 11

照葉樹自然林の土壌の吸水力は、自重の約 2.8 倍もあることが分かった。

腐植層が発

達すると可動堰や土砂災害や河川の氾濫の問題が解決するはずであると考えた。

	腐植層体積 (cm ³)	採集時重量 (g)	飽和含水時重量 : A(g)	乾燥重量 : B(g)	含水量(g) : C = A - B	飽和含水率 (体積比) : C / 200 (%)	吸水率(%) : C / B × 100	団粒構造破壊後の 含水量(g): D ※1	団粒構造破壊後の 吸水率(%) D / B × 100 ※2	自然状態の 密度(g/cm ³)
No.1	200	104.2	157.2	54	103.2	0.52	191.1	41.2	76.3	0.52
No.2	200	91.8	156.8	41.4	115.4	0.58	278.7	31.8	76.8	0.46
平均値	200	98			109.3	0.547	234.9		76.6	0.49

※1 団粒構造は、完全に乾燥させた後で土壌粒子をすりつぶし破壊した。 ※2 団粒構造破壊後の吸水率が No.1 と No.2 で同いため No.1 と No.2 の吸水率の違いは団粒構造の発達程度であると考えた。

資料 12

清水寺が所有する照葉樹林にモウソウチクが侵入し、広葉樹が衰弱しているのを、広葉樹の森に侵入したモウソウチクを伐採した。照葉樹林の生物調査では、ニホンアカガエルやギンリョウソウなど多様な生物を観察した。伐採の半年後には鳥や動物が運んだ種子が芽吹き、エノキ、ムクノキ、クスノキ、イヌビワなど鳥が造った森ができようとしている。私たちはこの鳥が造った森を「飯江川上流 100 年の森」と呼び、記念碑を造り除幕式に市長、県議会、市会議員に参列して頂いた。

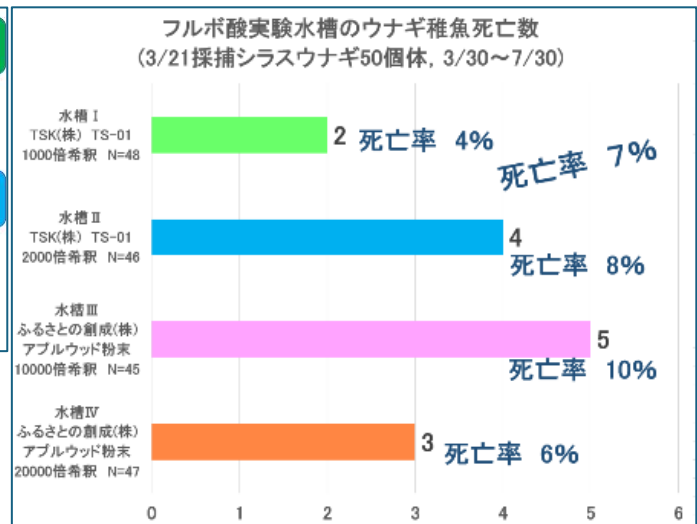


資料 13



私たちは栄養塩類にウナギが誘引されることを発見した。しかも、強く引き寄せられる個体と栄養塩類に興味を示さない個体がいることが分かった。このことから栄養塩類を頼りに川を遡上し個体の嗜好性の違いで成長の場所を決めている可能性がある。また、国内生産されたフルボ酸溶液溶液を入れた水槽で水替えを行わないで4ヶ月間ウナギ稚魚を飼育した。その結果、ウナギの死亡率は落葉を入れた場合と大きく違わなかった。このことから腐植物質が持続可能な水環境の形成に関わっている可能性が示唆された。肥料として使われる栄養塩類も最近注目されているフルボ酸も健全な森の土壌で造られる。この研究からウナギが育つ環境だけでなく、人が暮らす環境を守るためにも森林環境を改善していく必要があると考えた。

これらの森の恵みは健全な川を通じてウナギにも、人にも恩恵が与えられている。



資料 14



ワンヘルスとは人の健康と生物多様性は環境の健全性と切り離して考えられないので、総合的に守っていく必要があるという概念である。1993 年ベルリンで開催された世界獣医師会で採択された。この概念は新型コロナウイルスのパンデミック以降 WHO をはじめ世界の多くの機関で採択され、持続可能で安全な社会の枠組のひとつであると考えられている。2030 年に向け SDGs の目標で達成するためにも、ワンヘルスが示す「未来の人たちのために、自分の頭で“考え”、“話し合い(同意形成)”、“行動する”こと」を全ての人たちが実践する必要があると考えている。だから啓発と教育が必要である。このことにいち早く気付いたのはみやま市で、令和 4 年から市立小学校でワンヘルス教育の研究を始めた。私たちは市内唯一の高校としてみやま市のワンヘルス教育に関わり、講演会や学習会に参加している。今後、全ての繋がりを正常に戻すことで自然界を基盤とした持続可能性が復活することを経済活動を行っている企業主にも広げていきたい。福岡県中小企業家同友会から 11 月末に実施予定で講演の依頼を受けた。

